

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 20 日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2012

課題番号：21520030

 研究課題名（和文）北方宗教哲学の共生原理と「神」概念—北方少数民族先住民族とキリスト教—
 研究課題名（英文）The symbiotic principle of the philosophy of religion in northern countries and the concept of god -northern ethnic minorities and Christianity -

研究代表者

中里 巧 (NAKAZATO SATOSHI)

東洋大学・文学部・教授

研究者番号：40277348

研究成果の概要（和文）：本研究は、多様で異質な文化・価値観・世界観を人類が、互いに尊重し合い平和に共存していくうえで、最大の障壁である宗教間の理解の齟齬を無くして、真に互いの存在を認め合って相互に発展していくうえで中核となる思想的原理を究明するのが目的であった。本研究の成果は、従来、北方少数民族のアニミズムやシャーマニズムと高度に発展したキリスト教との間には、思想的に越えがたい齟齬が存在してきたが、こうした齟齬が、多重多層世界の想定をとおして、解決可能であり、血の復讐の克服・有機的自然観の受容・慈愛の成長をとおして現実可能であることを、明らかにしたことである。

研究成果の概要（英文）：It is the aim of this study that the main principle of the complementary ideas, by which peoples depending upon the different cultures and the views of value and world are living, should be found and resolve the religious conflicts as the utmost obstacle, in order that human beings will respect each other, live peacefully and accept each other. It is the result of this study that the fundamental misunderstanding between the animism-shamanism of northern ethnic minorities and the highly developed Christianity will be solvable by assumption of multiple-multilayer world, which helps the solution of blood revenge, accept the organic view of nature and increase the affection of human beings.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・倫理学

キーワード：共生・北方先住民・キリスト教・血の復讐・アイヌ・サガ・アニミズム・
宗教哲学

1. 研究開始当初の背景

北方少数民族の遺構や発掘人骨には、殺人や殺し合いの痕跡がなく、数千年にわたって平和的な生活の営みとともに相互扶助をおこなってきたことが、推定される。本研究は、およそ10年にわたり継続的に研究してきた作業の延長線上にあるものである。現在まで、アイスランド・デンマーク・スウェーデン・ノルウェー・フィンランド・日本において、教会建築・遺構遺跡・博物館や関係諸機関における遺物など、幅広く調査研究してきた。研究成果は、論文や学会の口頭発表をとおして、ほぼ毎年公にしてきた。より具体的な主な研究種目と従来の研究および中里による成果は、以下のとおりである。

(1) ノルウェースターヴ教会研究：ノルウェー本国において建築学や美術史を中心に研究なされているのが実情であり、本研究のような宗教哲学的アプローチは皆無である〔中里は、ノルウェースターヴ教会（初期木造教会）ほぼ20基の調査を終えている〕。

(2) 北欧神話や英雄伝承にかんするアイスランド語テキストからの研究：ヨーロッパにおいても日本においても進んでいるが、シャーマニズムやアニミズムに特化した研究はない（中里はアイスランドにおける北欧神話や英雄伝承にかんする基礎的文献学的調査はほぼ終えている）。

(3) スウェーデン・デンマーク・ノルウェー・フィンランドにおけるキリスト教受容以前の石器時代から鉄器時代にいたる考古学的・民俗学的研究：北欧各国においてめざましい進展がある（日本において、こうした北欧考古学の紹介は、ほとんどなされていない。中里は、スウェーデン・デンマーク・ノルウェーにおける遺構・遺跡・遺物の現地調査を数年にわたっておこなってきた。また、フィンランド国立博物館における先史時代展示コレクションについては、ほぼすべて調査を終えている）。

(4) イヌイットやサーミなど北方少数民族の調査研究：北欧各国それぞれ地域や部族の相異に応じて、異なっている。したがって北欧各国の研究成果を総覧する必要がある（中里は、スウェーデン・デンマーク・ノルウェーにおけるイヌイットやサーミ研究の博物館資料については、ほぼ調査し終えている）。

(5) 日本におけるオホーツク文化やアイヌなど北方少数民族調査研究は、戦前から含めて、多大な蓄積が北海道の関係機関に集積されている。

2. 研究の目的

本研究は、現在まで継続的に調査研究をおこなってきた成果にもとづいて、(1) 北方地域の少数民族に保存されているシャーマン儀礼やアニミズム的世界観における共生原理について、調査研究する。(2) そのさいヨーロッパ的思考のシンボルとしてのキリスト教が、そうした共生原理を如何に保存・変容・破壊しているかも同時に、調査研究する。(3) 今後、日本においてそうした共生原理を実践するにはいかなる方法が具体的に可能か、その展望を示す。(4) 西洋哲学における神観や理神論を再検討する。

3. 研究の方法

(1) 2009年度：①ノルウェー初期木造教会調査撮影済みアナログフィルムのデジタル処理化。②北方少数民族先住民関連文献収集（とりわけイヌイット・サーミ・シベリア先住民の民話資料）。③『グレティルのサガ』を中心とする血の復讐をめぐる文献研究と精読。④オホーツク文化人や北方少数民族の北海道における調査。⑤. 3月の公開講座と行った、作業や活動をおこなった。こうした作業の成果の一貫としてあらわした著書や論文として、本研究に関連する生命観・宗教観・死生観をあつかった『新版増補生命倫理事典』やキリスト教と比較研究する意味で『デンマークを知るための六八章』・「ケルケゴール思想研究にともなうアポリアについて」・「キリシタン信仰と死生観」を公刊した。学会では、「古代北欧社会における血の復讐―主としてサガを通して―」を口頭発表して、『グレティルのサガ』研究の一端を公開した。

(2) 2010年度：ノルウェー初期木造教会調査済み資料のデータベース作成作業・北海道アイヌの現地調査・イヌイットやサーミなど先住民の宗教儀礼や神話観の研究をおこなった。より具体的には、①北方地域の少数民族に保存されているシャーマン儀礼やアニミズム的世界観における共生原理について、調査研究した。②そのさいヨーロッパ的思考のシンボルとしてのキリスト教が、そうした共生原理を如何に保存・変容・破壊しているかも同時に、調査研究した。③今後、日

本においてそうした共生原理を実践するにはいかなる方法が具体的に可能か、その展望を示した。④西洋哲学における神観や理神論の再検討をおこなった。作業としては、年間を通しての初期木造教会データベース化作業・アイヌやイヌイトの文献資料のリスト化や情報の収集や解説・北海道アイヌ文化現地調査・初期木造教会図像解説・アイヌ文化やオホーツク文化やイヌイト文化の宗教儀礼の比較ならびに資料整理・論文作成・より学問的に意義ある形として公開講座に代わる検討会をおこなった。

(3) 2011年度：①ノルウェースターヴ教会図像（アナログ写真のデジタル化）の保存・整理作業ならびに分析をほぼ1年間通しておこなった。本作業は、本研究において一貫しておこなっているものであるが、北欧土俗信仰をめぐる初期キリスト教会における特徴を明らかにするものである。②アイスランド語テキスト・北欧全般における考古学的・民俗学的資料・イヌイトやサーミなど北方少数民族先住民族資料・日本におけるオホーツク文化やアイヌ文化などの北方少数民族先住民族資料といった、現在まで中里が調査研究してきた資料をとおして、西洋哲学に対する北方固有の共生原理を究明した。③アイヌ文化や、アイヌ以前の文化における宗教儀礼を調査するため、旭川に2回調査に訪れた。

(4) 2012年度：2009年～2011年にわたる研究成果をふまえて、①疑念として残された悪の克服について研究遂行した。②また、北方少数民族先住民族の宗教習俗や世界観を個別にその特質についてまとめて、近代化の過程で以下に悪の概念が変容したか、要点を明確化した。③北海道において作業未終了の調査をおこなった。

4. 研究成果

(1) 2009年度：ノルウェー木造教会図像のデジタル作業化を通して、ノルウェー以外ではあまり知られていない初期木造教会の詳細を多角的に分析できることになったこと。②北方少数民族先住民の世界観や生活感をより総合的に理解可能になったこと。③復讐をめぐる応報主義の限界や合理主義の限界と自然観の関係の明白化。④北海道立北方民族博物館における調査などから極めて内容豊かな個々の民族に対する研究方法や態度が明らかになったこと。

(2) 2010年度：①北方少数民族のアニミズム的自然観が今後の共生原理構築にとってモデルとなり得ることが明らかになってきたこと。②キリスト教における共生性と反共生性について、ノルウェー初期木造教会画像解説から明瞭になってきこと。③共生原理の構築にとって古神道とアイヌ宗教民俗ならびに縄文民俗の関係性が重要であることが

明らかとなってきたこと。④北方少数民族の宗教などとキリスト教との大きな違いは、暴力や支配や権力にかんする理解について、大きな違いが見られることが明らかとなったこと。

(3) 2011年度：①トーテムポールに類似した柱様の神像信仰がサーミ文化や初期ゲルマン文化に存在し、こうした神像信仰の変容がノルウェースターヴ教会の柱に認められること、ノルウェースターヴ教会の構成が北欧北方精神史の流れと重なっていること、タキトゥスの『ゲルマニア』に記述されている宗教儀礼やゲルマンの神の痕跡が、ノルウェースターヴ教会の伝承等に認められることなどである。②アニミズム的世界観に基づく生活の智慧ないしは大規模な自然破壊をともしなわれない村落の形成と維持が北方少数民族先住民族文化には認められること、ただし、血の復讐といった争いについては、とりわけアイスランドのサガ文学に保存されているものが目立つが、イヌイト文化・アイヌ文化・オホーツク文化・フィンランドのカレワラにも、サガほど激しくはないが、復讐という出来事は記述されており、復讐の解決が大きな要点であることを突き止めたことである。③縄文時代から現代にいたるアイヌ文化の精神的潮流の存在を認めたことである。

(4) 2012年度：①悪の克服についてその要点を云えば、どの民族においても程度の多少はあれ、血の復讐観が見られ、スカンディナヴィア地域や東欧地域における血の復讐観を最も程度の強い無限連鎖として続く復讐観として定義するならば、アイヌ・オホーツク文化・エスキモー・サーミ・シベリア少数民族などは、無限連鎖とはならず、自然観による調停が見られる。②近代化過程で世界観が変容したことはどの民族について例外がなく、そのメルクマールは生活であって、近代化以前の生活が持続していないかぎり、たとえ、宗教習俗の存続が見られるにしても、世界観は変容している。その理由は、少数民族の特徴であるシャーマニズムやアニミズムの宗教性が、世界観シンボリズムであるわけであるが、こうした宗教性は、自然に大きく依存する日常生活が変容してしまえば、大きな変容を受けるか消滅してしまうからである。ただし、こうした宗教性が変容もしくは消滅することによって、それまでは血の復讐観とのバランスが巧妙にとれて、外面的にも内面的にも平和が保たれていたにもかかわらず、近代化によってそれまでの宗教性が変容もしくは消滅したために、逆に、血の復讐観が先鋭化され、悪の解決が困難になるということが多々起こることになった事例が少なくない。③キリスト教との関連で云えば、我々自身のキリスト教観がローマンカトリックよりであるということ自体に、注意する

必要がある。むしろ、キリスト教最初期のギリシア教父の世界観や倫理観にまで遡及すると、汎神論的世界観やシャーマニズム・アニミズムを包括する宗教性が散見できる。正教は大きな鍵である。

(5) 国内外における位置づけとインパクト
アニミズム的世界観とキリスト教、ないしは多元的神観と一元的な神観の間を調停する現実的で有力な解決策は従来なかったと思う。また、血の復讐にかんする根本的解決策もまた従来見いだされずにきたと思う。本研究は、多層多重世界観を導入することによって、上記2つの難題について、抜本的解決策を提示できたと考える。

(6) 今後の展望

キリスト教の最古の形である砂漠の神学やニケア＝コンスタンティノーブル信条の伝統を維持し続けてきたキリスト教オーソドクシーの思想とりわけフィロカリアに見られるイエスの祈りは、より具体的に、アニミズム的世界観とキリスト教・多元的神観と一元的な神観・血の復讐等をめぐる抜本的解決策として、示唆に富んでいる。イエスの祈りから見たキリスト教オーソドクシーと北方少数民族などと接触の事例をさらに分析することが今後の研究展望となる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 11 件)

- ① 中里巧、血の復讐の解決を求めて、東洋学研究、査読無、第 50 巻、2013、73-89
- ② 中里巧、呪詛と自己犠牲、新キェルケゴール研究、査読有、第 11 巻、2013、34-47
- ③ 中里巧、北方のパーспекティヴ、白山哲学、査読無、第 46 巻、2012、71-92
- ④ 中里巧、古代北方社会における血の復讐、東洋学研究、査読無、第 48 巻、2011、1-17
- ⑤ 中里巧、キリシタン信仰と死生観、専修大学人文科学研究所月報、査読有、第 243 巻、2010、13-35
- ⑥ 中里巧、キェルケゴール思想研究にともなうアポリアについて、新キェルケゴール研究、査読有、第 7 巻、2009、78-97

[学会発表] (計 7 件)

- ① 中里巧、呪詛と自己犠牲、日本宗教学会、2012. 9. 08、皇學館大学
- ② 中里巧、北方における復讐観、日本宗教学会、2011. 9. 04、関西学院大学
- ③ 中里巧、古代北欧社会における血の復讐、日本宗教学会、2009. 9. 13、京都大学

[図書] (計 2 件)

- ① 中里巧他編著、太陽出版、新版増補生命倫理事典、2010、1537、VIII
- ② 中里巧 (村井誠編)、明石書店、デンマークを知るための六八章、2009、226-231、232-237

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中里 巧 (NAKAZATO SATOSHI)
東洋大学・文学部・教授
研究者番号：40277348

(2) 研究分担者 (0)

(3) 連携研究者 (0)